青春の一ページ

今回は昭和27年卒業の大先輩方から寄稿していただきました。
戦災で焦土化した中から復興した青春時代を、身をもって体験した貴重な記録です。

白龍健児

磯部　信雄（S27年卒）

静商に入学したのは昭和二十一年の春のことです。当時野球部の活躍は、私も身で感じておりました。放課後、運動場で部活に入部していない人達は、みな先輩の指導の下、校歌から応援歌第一～第六まで練習してまいりました。というよりはさせられたといった感じでした。下級生は座り、先輩たちは廻りと後ろに立って腕を振り共に合唱したものです。時々「この列は声が小さい！」「この辺の声が小さい！」といっては罰として、運動場一周とか、バケツの水を撒かれるとか大変でした。でも実際に野球の大会が始まると必ずといっていいほどの上級・下級生が草薙球場へと足を運んだものです。応援歌第一の「見よ栄冠は我が頭♪」、第二の「あげて帰れや勝どきを♪」と一貫となって声を張り上げ歓喜にひたったものでした。おかげさまでメモ無しでも校歌および応援歌を、七十八歳になっても唄えます。

静商健児健在なり。

静商六年生 初の男女共学はじまる

斉藤　健（S27年卒）

私は戦後間もない昭和二十一年四月、憧れの静岡商業へ入学しました。その後、学校制度の改革があり、中学部が併設され中学部と高校部となり、通算六年間、静商の学生生活を送りました。従いまして、四年間は最下級生、五年目にしてはじめての下級生を迎え、六年目でやっと最上級生となった次第です。

それがために同級生同士の絆は強く、また比較的穏健な人が多く存在しておりました。また、憧れの女子学生も四年目に第一期生（十数名）が入学し、カラフルとなりました。

私どもは、卒業後現在まで約六十年間推移しておりますが、同期生三百数十名のうち、約3分の1の方が物故されております。（合掌！）

さて顧みれば、中学時代は物資が乏しく、当時の教科書の一部には上質な藁半紙が使用されていた記憶があります。

卒業から就職し、特に県外に出ますと、母校の名声は高く、静商出身というとまず第一に「野球の強い学校ですね」、続いて「優秀な商業高校ご出身ですね」と必ず一目置いてくださいます。まさに、伝統校の強みを肌でしみじみと感じました。

私の転校記

波多野　克哉（S27年卒）

私の坦々とした人生歴の中で、学校の転校だけは例外に属する。

学習期間十二年の間に四回、在籍した学校は七校に及ぶ。その原因は、父の転勤、戦争の疎開、そして家庭の事情によるものである。

まず、小学校は岐阜県から、静岡、宮城県への二回。中学は疎開先の宮城県から編入試験を経て静高併設中学三年へ、高校は静高一年修了後に、母校である静商への各々一回である。

小学校時代は道への好奇心から、転校自体をむしろ楽しんでいた感すらあった。静高時代には大学進学を目標に、勉学に勤しんでいたが、一年生時期に長男の急死、次女の長期入院などが重なり、九人家族の家計は次第に厳しさを加え、次兄の大学中退、さらに私の大学進学も断念せざる事態へと進展していった。しばらくして就職に意を固め、必要とされる修学への道、即静商二年への転校となった次第である。

中学以降の度重なる転校では、学校による学力水準差や修得科目の変更など一方ならぬ努力が求められた。また挫折感との葛藤もあり、愚痴多き日々を記憶している。

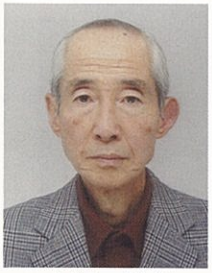
しかし、振り返れば順調な勤務、平穏な家庭生活の現在がある所以は、静商への転校が起点であり、人生の岐路でもあった。その意味から母校がわが人生を構築したとも言える。

もう一つ貴重な体験がある。それは、時代的、偶発的な背景が絡みあって発生したことだが、県下を代表する名門校静商、静高の両校で薫陶に浴したことである。

校風、方針を全く異にする両校に在籍した稀有な体験は、秘かな誇りとすら思っている。

以上の体験を通じて、運とか人生とは誠に不可思議なものである。

恩師 辻田先生を偲ぶ



古川　兵伍（S27年卒）

旧制商業学校に昭和二十一年四月、希望と不安を胸に抱いて入学し、過ごした静商六年間の学生生活は、戦後の混乱期であり、新教育制度への移行など激動の時代でした。その時期において一番忘れえぬことは、中学一年の学級担任が、本校に長年教職にあって、厳格な教育指導をされる辻田健治先生で、その先生の情熱と慈愛の籠った御訓と出合いは、私の少年期の人格形成に資すること多大で深く感銘を受けました。常々言われた「不断の努力」の金言や、論語の教えなど薀蓄豊かな御訓は、平素の行動の糧となり、身に染みて終生忘れ難い大切なものとなりました。

また、二十一年間いただいた賀状の御歌五十首には、転任先で厳しく情熱を持ち教壇に立たれる御姿や、本校を含む万を超す教児を何時も慈愛の心で見守るお心遣いなどを詠まれていて、長年月に亘り教育に熱心に取り組まれたことに敬服しました。御訓と賀状は私の宝物です。

以下は、先生の慈愛あふれる心の御歌で偲びたい。

昭和二十四年六月の教員異動の送別式で詠める。

二十五年捧げ尽せし学舎に
今し別るゝ言挙げずして

半生を捧げ尽していさ
さかも悔ゆるものなし
これの学舎

顧みていささか恥づる
吾が性の教えの鞭の厳
しかりしか

幾千の教児の心の片隅に
何か残りしこころの糧の

先生の賀状に詠める。

安倍川に骨拾はんと気
負ひ来しころ思ほへば杳
けくなりぬ

（昭和四十三年一月）

五十四年はぐくみたりし
教子らの顔眼裏に顕つ離
りたれども

（昭和四十七年一月）

八十路坂二つ越せども胸
の灯をかざしつづけむ燃
えつくすまで

（昭和五一年一月
生前最後の賀状）